原告団

遺族・CO裁判、災害責任追及、特集号

第百九十一号

原告団レポート

CO患者――田中 鶴雄さん

せめて定年退職までは

あんなに強かった体なのに――いまは責任をはっきり認めて……

昭和31年1月長男博くんと共にオートバイで。もとの大谷社宅附近であろうか。

命を大切に

電話のベルが鳴る。口ぶりから察すると友人からしい。

「……定年まで生きとるじゃろかと思いよったい――」

冗談ともとれるが、なんとなく真剣にも思える。CO患者＝田中鶴雄さんが住む、荒尾市原万田三〇〇番地の一、妙見社宅六十五棟に上がりこんですぐのことである。

まだ十月も初め、前線が停滞して雨続きではあったが、もうコタツが入り、田中さんは足を突っこんでいる。

「風邪ひくと、すぐ入院させられるので、それが恐かったい」と、いまの体の不安をかくそうとしない。とにかくきついという。

田中さんは、現在万田作業所で軽作業につき、もちろん屋内作業。それも半日ともたないようで、途中で何回も横にならなければならない。話を聞くうちにも、体を横にすることが何回も――。

障害等級七級の認定を受けたが、たびたび入・退院を繰り返し、一年前も天領病院に入院した。いまも三箇所の病院通いと、月一回の大学病院での検査がある。医師からは「命をだいじにするように」といわれてもいる。

自分でも「危いなあ―と思っている」そうだが、命をだいじにするとはどういうことなのか。じっと体を横たえているだけではいかん。とも考えるが、なにか最近は気力がなくなっていくみたいだという。

体のいたみ

昭和四十四年十二月に作成したカルテによると、「逆行性健忘合併症。意識喪失あり。自覚症状＝頭痛、吐気、咽頭痛、耳鳴り、四肢のしびれ、疲れ易い。精神症状＝軽度の神経症的態度、軽度の記銘力減退、軽度の記憶障害、軽度の計算障害。神経症状＝知覚障害」となっている。もちろんCO患者に共通する症状を、彼の場合もまたあらわしており例外ではない。しかし、カルテで見るかぎり精神、神経の乱れは比較的軽い方だといえるかもしれない。

問題は体である。被災時からの耳鳴りや四肢のしびれは軽くならず、いぜんとして続いており、立ちくらみ、目まい、頭痛がいまの田中さんの体をさいなんでいる。

妻の恵子さんがかたわらから、「頭の方より、体の方がよけいやられたんですかね」という。

入・退院を繰り返すなかで、少しでもと自分の趣味などに取り組んでみたが、根気が続かない。いまはなにをしても疲れるので、なにもしないで、ぶらぶらしていることが多い。

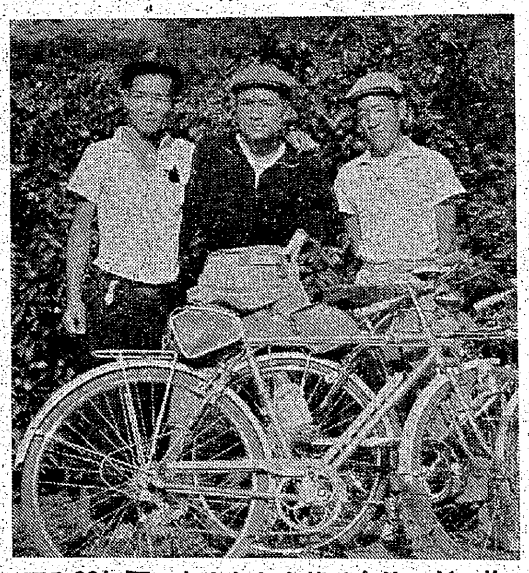
万田鉱から

田中さんは昭和三年一月五日生まれ（五十三歳）。昭和二十年十一月十五日の入社で、定年退職まであと一年三ケ月。

父親が万田鉱の汽罐場で働いていて、終戦直後、入れ替るようにして田中さんも万田鉱の坑外へ。

それまで三年ばかり東洋高圧で働いていたのだが、生まれ育った原万田原区の家が〝大牟田の空襲〟で焼失したので、万田山上町の社宅へ入っていたし、父親の定年退職もあり、坑外の熔接工として働くことになったのである。

父親は昨年九十歳で亡くなった。



昭和32年夏、友人たちとサイクリングの旅で。（向かつて左側の人が田中さん）

多芸の持主

被災前の田中さんは元気そのもの。趣味というか、多芸の持主で病気にも、病院にも縁がなかった。指物大工は玄人はだしだというし、カメラでは、当時はまだ扱う人も少なく、結婚式などにも頼まれて写し、自分で現像して台紙作りまでしたという。かすみ網からメジロ籠づくり、オートバイにサイクリング。遊びの方でも県境（福岡県と熊本県の）のビンゴゲームに始まって、スマートボールからパチンコへ。パチンコも相当の腕だったらしい。そのほか、山、海、川と果てしなくつづく。

昭和二十八年の百十三日の闘争の時などは鉄工所へアルバイトに行き、夜の勤めで当時の炭鉱の給料よりも多かったという。

バイクや自動車の修理もやるし、とにかく器用というか、熱が

妙見社宅での田中さん夫妻をパチリ

が、病気などしたことがないという位元気だったそうで、よく万田鉱の「米騒動」（大正七年）の話などを聞いたことがあるという。

その後、炭車修繕場などを経て坑内へ――。

やがて三川鉱への配転で、三交代の機械工として、爆発まで岩盤二十六卸のホーリング（大型捲上機）の運転手をつとめる。

妻の恵子さんは、昭和五年三月三十一日生まれ（五十一歳）、現在市内の第一製網に――。三十八年の爆発のあと、どうにも生活ができず、三十九年からの勤めである。

「結婚は」と聞くと、「なんとなく知りあって、なんとなく一緒になった」というから、戦後早々の恋愛結婚らしい。昭和二十五年、二十二歳と二十歳のカップルであった。

あの、激しく闘われた三池闘争中は、まじめに動員に参加、合間をみてはその器用さを活かしてがんばったものである。

被害のあと

――そして三川鉱の炭塵爆発。かれは当日、二番方で出勤。岩盤二十六卸で被災。しかし被災前後のことは全く記憶にない。のちに「お前と一緒だった」とCO患者で、定年退職した親泊さんから何度もいわれたが、思い出すことはない。

奥さんは、その日競馬場の馬券売りのアルバイトに出ていたが、ここでも爆発音を聞いている。

「坑外の事故だというので、夫は坑内だから大丈夫と思っていた」が、帰宅してから坑内の爆発だと知らされ、三川鉱の正門前の組合事務所へ。夜中すぎになって天領病院で毛布に幾重もくるまっている田中さんを捜しあてた。田中さんは真っ黒のまま、顔だけ出して眠っていた。

翌日、意識は回復したものの、同じことばかり繰り返す夫を見て、不安がこみあげてきた。

かなりひどい――。ということで久留米医大へといわれたが、そのまま天領病院で治療を受ける。ずっと個室にいたということは、その病状の重さを物語っている。

CO立法ができたとたんに強制退院、大地評病院（現在の曙病院で療養、みんなより一年おくれて三川鉱の柵内作業所へ。

しかし、それからが大変だった。入・退院の繰り返しが続き、いまだに不安におののいている日々を送らねばならない。

子供は成長

さて、このような苦悶のなかで二人の子供も生長を遂げた。

長男の博さん（昭和二十五年八月六日生まれ。三十一歳）は、九州大学法学部を卒業、弁護士になる夢は実現しなかったが、熊本県庁に入り、晴美さんという美しい伴侶を得て熊本市に住み、今年八月、紀光（のりひこ）ちゃんが誕生、初孫にも恵まれることができた。

次男の清さん（昭和三十一年十月二十六日生まれ。二十四歳）は今春、長崎大学経済学部を卒業、埼玉県の日本オイルシールに就職し、将来は海外へも、と希望を燃やしているという。

この息子たちには、大いなる未来があるが、苦難の父親の生きざまをどう乗り越えていくのか。

悩みのたね

苦しい生活の中でなんとか頑張った。子供たち二人を学校にやれたのは、七級の障害認定で、わずかながら年金が受給できたからだという。

もちろん七級患者ということで、肩身の狭い思いもしなければならなかった。

子供らは、それぞれの生活だが、定年になれば、やっぱり社宅は出らねばならない。近頃になってようやく家のことを考え、会社からも借り、退職金と、長男の県からの共済資金なども借り受け、土地を見つけ、やがて家も建てるところまでこぎつけた。

「あたりまえなら建てきらんとですがね」と、息子の援助があってのこと。熊本へということも考えたが、自分の病状を考えるとやっぱり近いところにと落ち着いた。「退職金だけでは建てられない」「会社が安価で土地を分譲してくれれば助かるけどね」と、つくづく語る。悩みの種なのである。

もどらぬ体

CO患者は、退職してもその後の生活に不安がある。

「体の弱い者のことを心配する」それは、かりに裁判の結果がどうなろうと、「体がもとに戻らない」からだ。

「会社は、責任をはっきり認めて当然の補償をしてもらいたい」というのが、切実なねがいだが、ともかく体がまいっている。

「夢も希望もない」「死んだ方がましだ」と思う時もあるそうだが、なんとか思い直して、いまは「せめて定年退職までは」と思いつめている。奥さんも「一日でも生きてもらうこと」が、いまの希望だという。

× ×

体の痛みが、ひしひしと伝わってくる。こんな体にした三井鉱山の責任は消えることはない。田中さんの胸のうちに、激しく燃えたぎるものがあるとしたら、それはままならぬ体へのいらだちと、大災害を引き起こした責任への憤怒ではないだろうか。